MEGARO MIX

REMIXREMIXREMI

ROCK'S DRUG #8

なんともノスタルジックな92年型ロック

最近のロック・ミュージックに漂う強烈なノスタルジーは、いったいどうしたことだろう？　92年型ロックの主流は、少し前の60年代のサイケデリック・ロック的なサウンドから、次第に70年代ハード・ロック／プログレッシヴ・ロック的なサウンドへと移行しつつあるようで、僕らはそこにかつて体験したロック黄金時代のノスタルジーをダブらせてしまうというわけだ。

実際に、ラジオから流れるガンズン・ローゼズの〝Live and let die〟という曲（73年に大ヒットしたP・マッカートニー＆ウイングスのカヴァー）を初めて聴いた時、僕は何とも言い難いノスタルジーを覚えた。まるで自分が小学生の頃、それこそロックに夢中になり始めた頃のあの感じが蘇ったのだ。〝カッコイイ！〟と思った。〝やっぱりロックはこうでなくちゃ！〟とも思った。だが、僕らはこうしたノスタルジーを肯定しても良いものか？

現在、アメリカやイギリスを始め日本の若いロック・ファンにも絶大なる人気を誇るニルヴァーナにしても、オールド・ロック・ファンにとっては、そのサウンドに新鮮さを見い出すのは容易なことではない。まさに70ｓロックしてるニルヴァーナの泣き泣きのメロディーやハードエッジなギターによって僕らのロック魂（!?）は瞬間的に呼び覚まされたとしても、それも結局は昔のエアロスミス辺りを重ね合わせながらロック黄金時代のノスタルジーに浸っているに過ぎないのではないかという後ろめたさも感じる。

極端な言い方をするならば、現在のロック・ミュージックを楽しむ為には（ロックを知らないガキんちょでもない限り）それを徹底的に懐かしむしか手はないのかも知れない。そしてロックに新鮮さを求めることなど、もはや放棄しなくてはならないのかも知れない。音楽に何らかの新鮮さを求めるのならば、少なくとも今のロック・ミュージックは諦めた方が懸命だろう。

しかし、そうは知りつつも、懲りもせずにロックの新譜をチェックし続け、時にはかつて夢中で聴いた70年代ロックの名盤をひっぱり出してきてこっそり家で聴いてしまうというバカ野郎は僕だけではないはずだ。その理由は、今だにロックに何らかの新鮮さを期待しているというよりも、むしろ過去のロック体験のノスタルジーに浸ることが、かつてなかったほどに心地よく感じられるからに他ならない。このノスタルジーは強力だ。逃れようと思ってもそう簡単には逃れられるものではない。嫌いだけど、でも好き、みたいなロックと僕らのアンビヴァレンツな関係は、まるでヤクザな男（＝ロック）に惚れた女みたいなものか？

ともあれ、今やロックに限らずあらゆる音楽にノスタルジーは漂っており（ハウス、ヒップ・ホップも既に例外ではない）、この先、僕らを取り巻く環境すべてが強烈なノスタルジーに支配されそうな気さえしてくる。

REMIX　小泉雅史

TRAFFIC OF DANCE GROOVE #8

くたばれハードコア!!

と言いたくなるほど2つのハードコア・サウンドが巷の噂になっている。本当は触れたくないけれど、あえて今回は悪口を言いまくろう。

ハードコア・ラップ（NWA、アイス・キューブ等）とハードコア・テクノ（T-99、LAスタイル等）。それぞれアメリカとヨーロッパで、そして一部日本でも大流行の2つのサウンドは、ともに10年ほど前に音楽の前線から死に絶えた（ニュー・スタイルを生み出さなくなった）ロック・ミュージックの生れ変り、ゾンビだ。機械・工業時代の遺物が、特有の表面的刺激と様式美などの内実をそのままに、ヒップ・ホップとハウスの意匠をかりて蘇っている。アメリカの「現実」になってしまったハードコア・ラップ、かたやヨーロッパの「現実逃避」になってしまったハードコア・テクノ。米・欧の標準的なローカル・チルドレンお気に入りのこの2つのサウンド、日本ではハードコア・テクノは先端を気どるくたばりぞこないニューウェイヴァーと勘違いサブカル野郎の、そしてハードコア・ラップは同様のオールドロッカーの最後の砦にもなっている。

ランDMCがキング・オブ・ロックと名乗ったのは今は昔。ありもののスタイルでがなりたてるハードコア・ラップは、ハードコア・ロック同様、衝動、言葉、スタイルいずれにおいても惰性態の集合だ。

ハードコア・テクノには実は4種の音楽リスナーが合流している。ヘビメタ、ユーロ・ビート、ボディ・ミュージック、テクノ・ハウス。ヨーロッパではハードコア・テクノは、ヘヴィメタ好きロー・ティーンエイジャーのお気に入りで、実際ハードロックそっくりの展開や様式美で作られている。またレコード店ではユーロ・ビートのコーナーに混じって置かれているし、日本でもジュリアナをはじめディスコのイケイケ・ガール一押しのサウンドだ。そして何よりハードコア・テクノは、ニュー・ウェイヴの時代遅れの地方拡散現象だったボディ・ミュージックの直系だ。そしてテクノ・ハウス（テクノ）……には道を間違わずに立派に「未来」を築いてもらいたいもの。

近頃、ハウス系サウンドを代表する3人のアーティストにインタビューする機会があった。ジャズやゴスペルに根ざしたクロいガラージ・ハウスを代表するトニー・ハンフリーズ。レゲエやアフロ、ヒップ・ホップとクロスオーバーな活動をする天才ボビー・コンダース。そしてテクノ・ハウスのオリジネーターであるデリック・メイ。この3人にあえてハードコア・テクノをどう思うかと質問してみた。トニーは「若い人が飛びつくのは分かるけど、アンダーグラウンドな人がそれに移ることはないよ」と穏和に笑いながら答えたが、ボビーは苦虫を噛み潰して黙りこんでしまい、知的なデリックは悲鳴をあげて「あれはテクノじゃなくヘヴィメタだ」と珍しく語調を荒げた。

REMIX　若野ラヴィン

EMIXREMIXREM

NON STOP CULTURE #8

極東セックス解放戦線、異状あり!?

10年ほど前、コピーライターの糸井重里氏が主宰した「ヘンタイよいこ新聞」というメディアについて、時の変態ライターの草分け的存在の青山正明氏は〃ヘンタイはよいこでは決してありえない、変態はいつの時代も世間から忌み嫌われ、疎まれる存在に他ならない〃と主張していたことを、先日思いだした。別冊宝島の『変態さんがいく』は、近年のボンデージやフェティッシュファッションの大衆化に対するカウンターパンチとして、リアル変態の手記や取材から〈リアル変態道〉のたくましさを説く啓蒙の書だった、かのように期待されたのだが、そのじつ登場する自称変態ドモの言いわけを読んでいるうち、ほとほと呆れはててしまった。どうして自らの倒錯の起源を幼少期のトラウマに収斂させてしまうのだろう? とりわけダメなのが「変態に憧れる女」の類。自らの業ゆえに、キモチイー＝得してる、と信じて疑わない輩に、同書中の一筋の光明であるニューハーフ〈とし恵〉さんの爪垢を飲ませたい。でも嬉んじゃうかも……

結局、性的に解放されていない実状は、身体破損や関係性の打破では突破できないんじゃないかしら。世界レヴェルでも、文明圏での性革命が事実上壊滅し、エイズの台頭を加えると人類のセックスライフは、今後ますますお寒いものになるのだろう。だからといってセックス特集の雑誌を完売させ、一ツ橋や銀座や音羽の版元を潤す義理もなかろう。そんな昨今、在野の有志で、セックスカルチャー全般へのアクセスと新保守波性生活の再評価を旨とした同人誌を刊行するとの告知が、アウトバーンに届いた。その名もズバリ『ポップセックス』。期待していいのかしら……

AUTOBAHN　木村重樹

★ポップセックス：
問合先（返信用切手同封のこと）
〒110台東区谷中7・17・6
MIN ASSOCIATES内　PSグループ宛

REMIX

Nu Era Music

毎月１７日発売

定価７８０円（本体７５７円）

編集・発行：株式会社アウトバーン〒１１１東京都台東区浅草橋1-３２-6TEL０３（３８６３）４３５０FAX０３（３８６３）４３７０
営業・発売：株式会社青林堂〒１０１東京都千代田区神田神保町１－６２TEL０３（３２９１）９５５６FAX０３（３２９２）７３６８